2014　南アルプス大縦走（広河原～畑薙湖）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　記録者：河西

**期日**：8/14～22（予備日を二日消費。行程を下記のように変更。）

**参加者**：河西（三年）、大村（二年）、新田（二年）、小林（一年）、篠原（一年）

**行程**

**一日目/8月14日**

5：35　JR中野駅　到着

　　　直前で小林が転倒して出血。大事には至らなかった

8：10　甲府駅　到着

　　　ここで新田と合流

8：55　バス乗車

11：20　奈良田

　　　　インターネットの時刻表より1時間以上遅れそうだ。後で知ったのだが、バスは遠回りのコースを使って迂回していたらしい。情報収集の不足を反省した

12：05　広河原　到着。1時間10分の遅れと大雨により広河原山荘のテンバでの停滞を決定した。この時点での予報は、15日は晴れ。16・17日は雨。明日は3：00に起きて、10：30までに北岳山荘に到着できたら熊ノ平小屋を目指すことにした。寝る時点では濃霧・小雨

**二日目/8月15日**

3：00　起床。月が出て晴れ間もある。微妙に雨がぱらつくときもあるが好天

3：45　出発

4：35　一本。木の根と岩の急登。小林がバテてしまった

5：35　一本。急登は終わらない。快晴

6：15　白根御池小屋　到着。水汲み休憩5分

　　　　ほぼ計画通りの時間で来ている

6：40　草滑りの急登途中で一本。

7：40　一本。曇ってきて霧雨が降り始めた

9：15　北岳肩の小屋　到着。強風と本降りの雨によりこの小屋のテン場に泊まる。テントが飛びそうなほどの風。かなり寒い。小屋の方の話だと、今後は基本的に曇りで晴れ間もあるとのこと。この後に泊まったほぼすべての小屋の人に同じようなことを言われた。携帯の予報では16日はBとA。風は強い予報。17日と22日以外は晴れそうだ。明日は4時に起きて、11時前には熊ノ平小屋に着きたい

**三日目/8月16日**

4：00　起床。雨・強風。電波が入る携帯で天気を調べる。

　　　　北岳：午後から晴れ。その後21日まで晴れ。

　　　　塩見岳：17日はC(登山不適)。その後21日まで晴れ。

　　　　赤石岳：ずっとA（登山に適する）。

　　　　聖岳：ずっとA。

以上より、この日は11：30時点で天気・風が良くなれば北岳山荘まで行く。この日停滞するしないに関わらず、明日中に熊ノ平小屋まで行かなければ23日に下山できない。この時点で、途中兎岳避難小屋に泊まれば一日行程を短縮できることに気づく。

　　　　結局天気は変わらず、この日は停滞した。16時頃、飯の準備をするために外に出たらガスが晴れかけていた。テントでしばらく話していると、日が差し始めた。風は強い。外に出ると快晴。富士山や鳳凰三山が良く見える。しかし、この後またガスに覆われた

**四日目/8月17日**

4：30　起床。晴れ。暴風。テントをたたむのも難しい風。ポール袋を飛ばされてしまった

5：10　出発

5：50　北岳山頂。晴れ間あり。ここから北岳山荘まで雨まじりの強風で、防寒着を着ない

　　　　とかなり寒い

6：55　北岳山荘　到着

7：25　北岳山荘を出発

8：48　一本

9：04　間ノ岳山頂。ガスっているが風は弱まった

9：45　三峰岳。急な岩場で一本

10：44　一本。雨具が暑いくらいまで風は弱まった

11：13　熊ノ平小屋　到着

**五日目/8月18日**

3：00　起床

3：45　出発

4：45～7：50は50分歩いて10分休憩を繰り返す。この間ずっと小雨が降り続いた

8：20　晴れ始めた

　　　　ここから東峰まで、危険な急登や、両側が崖の稜線横断があった

9：00　塩見岳東峰　到着

　　　　無風。晴れて絶景が広がった。急峻な岩場で立ち往生。空身で降りて後からザッ

クを渡すところもあった

10：50　塩見小屋

11：50　一本。木漏れ日の美しい森

12：50　一本。ぬかるみがひどい。アップダウンも多く、意外と疲れる

13：41　三伏峠小屋　到着。水場は噂通り遠い。初めて外で自炊できた。17：20頃雨がぱ

らついた

**六日目/8月19日**

3：00　起床。雲一つない星空。気温は低い

3：40　出発

4：30　一本。ガスが濃く、何度か道を間違えて引き返す。風がやや強い。烏帽子岳を通り過ぎた

5：30　一本。小河内岳と避難小屋分岐。風は強いが青空が見え始めた

6：30　一本。小河内岳山頂から一気に晴れ、休憩時点では曇り。大日影山まであと少しのあたり

7：34　一本。板屋岳までの樹林の急登。立ち枯れが多い。ガスが濃い

8：30　一本。前回の休憩終わりから晴れてきた

9：30　一本。前岳への登り。日差しが強く、虫が多い

10：30　一本。カールのど真ん中。上へ行くほど岩から砂の地形に

11：30　一本。ガスが晴れず、風も強いため荒川岳へのアタックはやめた。荒川小屋への下りは急だが、前岳からの尾根に遮られて風は弱い

12：31　荒川小屋　到着。浜松北高校の30人ぐらいの団体が来た。時々赤石岳の展望がすごい

七日目/8月20日

4：30　起床。富士山の朝焼け。快晴

5：15　出発

6：06　一本。小赤石岳の肩途中。おそらく北・中央アルプスまで見えているであろうほどの晴れっぷり

7：11　赤石岳山頂。直前でガスってきた。そのガスもとぎれとぎれで、ブロッケン現象（太陽光がガスに乱反射して、円状の虹が見える、的な）が見えた。風が強い

8：10　一本。大斜面下のコル。赤石岳の下りで河西転倒。前方に投げ出され右足首を強打してしまった。後の山行に個人的には響いた

9：23　百間洞山の家　到着。ここまで百閒平からかなり下った。昨日から抜きつ抜かれつしていた夫婦に会う。兎岳避難小屋の情報を頂いた。今日中に聖平まで行くとのことで、ただ驚く（コースタイム12時間以上）

9：45　出発

10：30　一本。中盛丸山の手前。急登だった

11：30　一本。中盛丸山下りの急坂で足が終わった。大村がお腹を壊してしまった

13：02　兎岳避難小屋　到着。みんなもう動けない。中は補修されていてきれい。携帯トイレが備蓄されている。つまり、トイレはない。水場もない。夫婦とは避難小屋手前の分岐でお別れした。これだけの間同じ人たちと前後したのは初めてだった。いろいろアドバイスや人生の話をしていただき、割と名残惜しかった

**八日目/8月21日**

4：30　起床。晴れ

5：15　出発。既に右足に激痛。かなりゆっくりとしか進めなかった

6：03　一本。新田に先頭を交代

6：53　聖岳山頂。風も弱く景色もいい。遠かった富士山が近くなったことで、歩いた距離の長さを実感した

7：36　一本。下りはスリップ多発。長崎大学に会う

8：44　聖平小屋　到着。数名トイレに駆け込む。かなりクオリティが高く、トイレは水洗。ここの管理人さんが兎岳避難小屋を掃除してくださっているそうだ

9：10　出発

10：00　一本。上河内岳肩手前。道はしっかり踏み固められていてかなり歩きやすい。薄雲が広がっている

10：52　一本。上河内岳の肩。最後の主な登りが終わったという達成感が押し寄せた

12：00　茶臼小屋　到着。分岐の前に2～30メートルの登り返しがある。バスの予約の変更をした。結構満員で、電波が入らなかったら終わっていた

**九日目/8月22日**

4：00　起床。快晴。最後の朝にふさわしい

4：45　出発

5：45　横窪峠。道はとても歩きやすい

6：48　一本。沢沿いの道。とても美しい連釜を持つ沢

7：45　畑薙大吊橋　到着。182mの吊橋。天気も良く、最高の達成感。湖が広がっていた

10：00　温泉のある白樺荘に着いた。片道1時間近く歩いた。12：45まで風呂・昼食（あまりの嬉しさにみんな贅沢をしてしまいました）・食休みをのんびりして、帰りもえっちらおっちらダムまで歩いていたら、来るときに見かけたおばちゃんが偶然通りかかったバスの運転手に交渉してくれて、そのバスに乗せてくださいました。最後に人の温かさにふれた

**総評**

14日のいきなりの停滞、16日の肩の小屋での停滞により、前半で大きく遅れを取り、エス

ケープが濃厚かと正直思っていたが、熊ノ平小屋以降かなり好天に恵まれ、最終的に1日

遅れでゴールまでたどりつけたことがまず嬉しいし、参加者には感謝したい。初めて唯一

の三年生として活動を企画し、運営したわけだが、来る前からかなりハードな山行になる

ことは分かっていた。その中で、各人の今まで見えなかった素晴らしいところを見つけら

れた。小林は、共同装備が少なかったとはいえ、かなり体力がついたし、常に地図を確認

する姿勢は素晴らしいから、ほかの一年、ひいては二年もその積極性には学ぶところがあ

ると思う。篠原も、テントを持ちながらのあの長旅は相当な成長があったから、それを今

後に活かしてほしい。二年生の二人は、この活動を通して、なんとなく「こいつなら任せ

て大丈夫だな」というような、言葉にはしづらい何かを感じられるようになった。そうい

うのが大事な場面もあるだろうから、よかった。

　一方、自分が途中で怪我をしてしまったことが情けなくてしょうがない。きちんと緊張

感を持っていれば転ばなかった場所だ。景色やその後の行程に気を取られてしまったこと

が原因。

　最後に、この活動はただ楽しいだけでなく、厳しい山の一面も垣間見ることができ、登

山のレベルの向上につながる良い活動だった。参加者が、この活動で得たものをこれから

に活かせることを願う。